



『古事記』研究：  
<海の異郷>を中心に(二〇〇四年度卒業論文要旨集)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-01-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桐田, 郁 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007240">https://doi.org/10.32150/00007240</a>

『古事記』研究 ― 海の異郷 ― を中心に ―

古典文学研究室 一〇四一 桐田 郁

本研究の目的は、〈海の異郷〉すなわち「常世国」「綿津見神之宮」を中心に、『古事記』の表現や構成を分析することにより、『古事記』において、〈海の異郷〉がどのような特徴を持っているのかを明らかにすることだった。

「常世国」は、「波の穂」の表現とともに用いられることもある海上の〈異郷〉であり、従来「不老不死」の理想郷のイメージは「橘」を除いては見られず、また「死者の国」を表すこともなかった。「綿津見神之宮」も、海底ではなく海上にある〈異郷〉であり、「海原」の語もこの〈異郷〉を指していた。

これらの〈海の異郷〉は、治水の能力を与えるなど、「葦原中国」の完成や繁栄に奉仕する存在であった。一方で、そこに行くことが死を暗示したり、弟橘比売の場合は天皇家の力の源となるものを奪ったりする場所でもあった。それは、〈海の異郷〉が従来指摘されてきた、「不老不死」のような非現実的な「豊かさ」や「幸福」をもたらす場所ではなく、現実的なもの、例えば稲の豊穡をもたらす場所であったからである。

また『古事記』においては、〈海の異郷〉に関わる「玉」や「橘」という物のつながりや、海を渡ることで存在としての、出雲系の蛇神三輪山の大物主神や肥長比売、天之日矛の系譜の多遅摩毛理や神功皇后という人・神のつながりが見られた。

これらの物や人のネットワークを含め、〈海の異郷〉の力がなければ、「葦原中国」の繁栄はなかったのである。